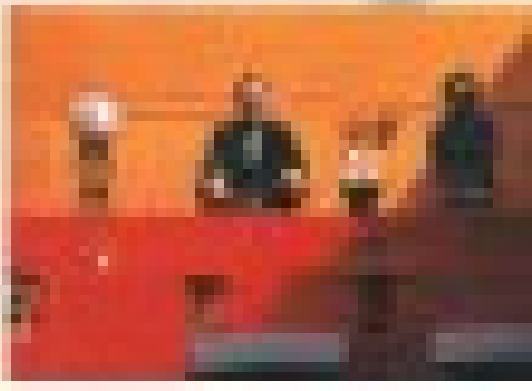
日汉对照 日本风情丛书

日本

国民生活透视

李兴珍 编著



吉林大学出版社

日汉对照

日本风情丛书

日本国民生活透视

余月仙 编著

东方出版中心

图书在版编目（CIP）数据

日本国民生活透视：日汉对照/余月仙编著.—上海：东方出版中心，2000.10
（日汉对照日本风情丛书）
ISBN 7-80627-591-6

Ⅰ.日… Ⅱ.余… Ⅲ.日语-对照读物-日、汉
Ⅳ.H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2000）第 44824 号

日本国民生活透视

出版发行：东方出版中心
地址：上海市仙霞路 335 号
电话：62417400
邮政编码：200336
经销：新华书店上海发行所
印刷：昆山市亭林印刷总厂
开本：787×960 毫米 1/32
字数：150 千
印张：8.25　　**插页**：2
印数：6,000
版次：2000 年 10 月第 1 版第 1 次印刷
ISBN 7-80627-591-6/H·59
定价：10.00 元

版权所有，侵权必究。

目　録（目　录）

1. 日本人の一生と行事 …… 3
日本人的一生与仪式 …… 145
2. 結婚の理想と現実 …… 9
结婚的理想与现实 …… 150
3. 高齢化社会 …… 16
老龄化社会 …… 156
4. 義理人情 …… 21
义理人情 …… 160
5.「働きバチ」の余暇 …… 28
“工蜂”的业余时间 …… 165
6.「通勤地獄」 …… 33
“通勤地狱” …… 169
7. 便利な交通機関 …… 37
方便的交通工具 …… 172
8. 晴着に願いをこめる …… 43
倾注在和服上的心愿 …… 177
9. コニークな日本人の制服観 …… 46
日本人独特的制服观 …… 180
10. 服装のマナー …… 50
服饰礼节 …… 183
11. 熱狂的な野球ファン …… 53
狂热的棒球迷 …… 186

12. 贈り物が好きな日本人 …… 56
喜欢送礼的日本人 …… 189
13. 入浴ずきな日本人 …… 60
喜欢洗澡的日本人 …… 192
14. 買物天国 …… 63
购物天堂 …… 195
15.「大蔵大臣」 …… 70
“财政部长” …… 201
16. カード時代 …… 73
磁卡时代 …… 204
17. 日本人は金持ち? …… 76
日本人是富翁吗? …… 207
18. 都市の一戸建て住宅 …… 80
都市的独门独户住宅 …… 210
19. 畳と床 …… 86
榻榻米和地板 …… 215
20. 自宅でパーティーを開く習慣がない …… 93
没有在家中开派对的习惯 …… 220
21. 食生活——国際派 …… 96
饮食生活——国际派 …… 223
22. 日本料理——五味五色五法 …… 100
日本料理——五味五色五法 …… 226
23. 日本料理——皿の上の芸術 …… 105
日本料理——盆子上的艺术 …… 230
24. 日本人と酒 …… 113
日本人与酒 …… 236
25. 花見 …… 117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

赏樱花 …… 239
26. 新聞王国、出版王国 …… 121
报刊王国、出版王国 …… 242
27. 学歴社会 …… 126
学历社会 …… 246
28. 休暇と行事 …… 131
休假与传统节日活动 …… 250

日 语 原 文

1. 日本人の一生と行事

人生80年。男は27、28歳,女は24、25歳で結婚し,結婚して2、3年の間に子供を1人か2人つくり,子供が成長して結婚するのが男女とも50代後半。60歳か65歳ぐらいで夫は仕事をやめ,その後は夫婦だけの老後を送る——というのが現代日本人のおおまかなライフサイクルである。

1950年代後半以降の高度経済成長時代には,諸外国から「エコノミック・アニマル」と評されたように,仕事に打ち込むためにはある程度,家庭を犠牲にしてもかまわないと考える「モーレツ型」がサラリーマンの主流だったが,現在では豊かで楽しい家庭を築くために働きたいとする「マイホーム型」が70%を占めている(日本リクルートセンターが1984年に実施した「新入社員は何を考えているか」の調査結果)。

家庭での中心はやはり子供である。3歳と5歳の男の子,3歳と7歳の女の子の祝いである11月15日の七五三のほかにも,毎年,3月3日の桃の節句には女の子の,5月5日の端午の節句には男の子の無事な成長を祈って祝う。6、7歳の子供が小学校に入学すると,今度は教育が親の最大の関心事になる。日本の教育は6、3、3、4制で,小学校6

年間,中学校3年間が義務教育である。その上の高等学校への進学率は95%,大学へも3人に1人の割合で進学している。こういう高学歴社会を反映して,多くの親は子供を少しでもいい学校へ入れようと,子供が小、中学校のころから塾通いをさせる。高校、大学の受験に失敗すると,1、2年は予備校にも通わせる。したがって,教育費の捻出は親にとっては頭の痛い問題になっている。

子供が20歳になって成人式を終えると,一応,親の責任を果したことになるが,アメリカなどと違って,日本の大学生は授業料も生活費も親がかり。結婚式の費用まで親に頼っている若者も少なくないので,親が子供から解放されるのは、就職、結婚を経て,子供も自分の家庭を持ったときということになろう。気がついてみると,夫はもう定年が目の前。子供たちは自分の生活をエンジョイするばかりで,あまり親のことを顧みない。そのうち定年がやってくる。どこかで寂しさを感じながらも,ようやく夫婦2人して,趣味に生きがいを見いだしたり,旅行を楽しんだりして静かに余生を生きるというのが日本人の一生である。

つぎは日本人の一生においての主な行事を紹介しよう。

お七夜

こどもが生まれて7日目に名まえをつけてお祝いをする。これを「お七夜」という。古くは生まれ

た子の母方の祖父が名まえをつけることが多かったのだが，親が尊敬している人に頼んで名まえをつけてもらうこともあった。最近は親がきめる場合が多いようだ。

「お七夜」には生まれた子の名まえと生年月日を和紙に筆で書いて，自宅の神棚の下か床の間に張る。

日本人は子供が生まれると14日以内に，父または母が生地の市町村役場に届け出ることが法律で定められている。

お宮参り

日本の宗教人口のうちの仏教徒の数と神道信者の数を足すと，日本の総人口より多くなる。これは日本人の中に葬儀などを仏教の儀式によって行う一方，神社をうやまう人がたくさんいるからだ。

神社にまつられている神の中には，祖先の神である「氏神」と地域の神である「うぶすな神」があるが，この二つの神が一つの神社にまつられていることも少なくない。そして，この神社は普通「氏神様」と呼ばれている。

ある地域で子どもが生まれれば，神社ではその子をその地域の神の子と考え，「氏子」にかぞえる。この新しい「氏子」が初めて「氏神」にあいさつをするという意味でお参りに行く行事を「お宮参り」という。

「お宮参り」は男の子なら生まれて31日目，女の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子なら生まれて32日目にするのが普通である。両親に抱かれて，近くの神社に参詣する習わしがあったが，最近はめっきり少なくなっている。

出産祝いのお返しをするのもこのころで，昔はお赤飯や紅白のおもちを配ったのだが，今はデパートなどから紅白の角ざとうや子どもの名入りのふろしきなどを送る。品物の上にかける紙には「内祝い」と書き，子供の名まえで送る。

七五三

日本には子供たちの成長過程の節目、節目に，健やかな成長と幸せを願うお祝いの行事がある。11月15日に行われる「七五三」もそのような通過儀礼の一つである。3歳と5歳の男の子，3歳と7歳の女の子が着物や洋服を着飾り，両親や祖父母に伴われて，氏神様や大きな神社に参詣する。また紀念撮影をしたり，長寿を願って，「千歳飴」をなめたり，身内の人たちといっしょにご馳走を食べたりして祝う。日本人は奇数をめでたい数とし，そのうちから三つを取ったものである。最近は復古調に乗って，盛んになっている。

江戸時代にはこの日を「七五三」と言わず，「宮参り」と言っていた。3歳の子がこの日を祝うのは，この日から髪の毛をのばし始めるという意味で，その式を「髪置き」といった。5歳の男の子が祝うのは，この日に初めてはかまをつけて公式の場に出るという意味で，その式を「はかま着」と言った。

7歳の女の子が祝うのは，この日から着物のつけひもをとって帯をしめるという意味で，その式を「帯とき」と言った。しかし，こういう意味は現在ほとんど忘れられているようだ。

成人式

毎年1月の第二の月曜日は「成人の日」と言って，この日までに満20歳になった人たちの成年に達したことを祝う。大人になったことを自覚し，自ら生き抜こうとする青年を祝い励ます。これはごく新しいことで，昭和23年(1948年)に始められたものである。この日は国民の祝日になっていて，市区町村が20歳の人たちを公会堂や区民会館に招いて，「成人式」を行う。この日の服装にきまりはないが，男性は洋服で，女性は和服が多いようだ。男性も女性も満20歳になれば，選挙権をもち，法律上すべての権利が保障される。

厄年と年祝い

成人してから老年を迎えるまでに，男女とも災難や不幸に会いやすい年齢があるため，気をつけるようにという言い伝えも残っている。つまり，男性は25歳と42歳，女性は19歳と33歳を厄年と呼び，人生のふしめとして，その年はあまり無理をせず，自重するようにというわけである。その中でもとくに危ないのは男性は42歳、女性は33歳で，親がこの年齢のときに生まれた子どもは育ち

にくいと言われた。また,42は「シニ」だから,「死に」に通じ,33は「サンサン」だから,「さんざん」に通じるなどと言って,人人はその年をきらった。

もちろん,厄年はなんの根拠もなく,現在ではあまり信じる人もいないが,多少でも気にする人は,あらかじめ神社や寺院に参詣して,厄払いという祈祷をしてもらう。

60歳になると,還歴といって長寿の祝いをする。昔の暦は60年でひとまわりするようにできているので,人が生まれて61年目には生まれた年に「還ってくる」,つまり,「赤ん坊時代」にもどるという意味で,2度目の誕生を祝う。現代の日本は寿命がのびて,世界有数の長寿国の仲間入りをしているが,昔は60歳も長生きしたということで家族中で祝ったものである。

70歳を「古希」といって祝うが,これは有名な杜甫の詩から出たことばである。77歳を「喜寿」というが,これは喜という字を草書で略して書くとき「㐂」と書くからである。また,88歳を「米寿」というのは,米という字を分解すると「八十八」になるからである。そのとしになるとき、お祝いする習慣がある。

2. 結婚の理想と現実

日本人が結婚するのは，男は26～27歳，女は23～24歳というのが明治以来の統計に現れた数字である。昭和20年(1945年)までは，夫と妻は四つ違いが普通だったが，それ以後は夫と妻の年齢が近くなり，三つ違い、二つ違いの夫婦が普通になった。これは女の結婚年齢が高くなってきたためである。

女性の結婚年齢が高くなったのは，女性の学歴が高くなったこと，女性が職場へ進出したこと，女性が自主的になったこと，医学が発達したことなどが理由として考えられるだろう。しかし，女性の適齢を23歳と考えている点では変わりはない。

しかし，未婚の女性のすべてが結婚したいと思っているわけではなく，昭和50年(1975年)ごろまでの「結婚は女の幸福」という価値観はくずれてきたようだ。昭和55年(1980年)1月に発表された調査では，結婚を望むのは「精神的に安定するから」と答える女性が一番多かったそうだ。

結婚したいと思っている女性の理想は「頼りになる男性」だが，現実に結婚するとなると，相手の「やさしさ」を決め手の理由にあげている人が多いようだ。

一方，独身の男性の理想は，相手が「思いやり」のある女性であることだ。

結婚にいたる過程が見合いであるか恋愛であるかによって結婚を「見合い結婚」と「恋愛結婚」に分ける。戦前の日本では，見合いによる結婚が一般的であったが，最近の若い人たちの間では，恋愛から結婚へと進むケースが約70％以上を占めている。

見合い結婚も，依然としてある。娘が結婚適齢期になると，親は娘にすすめて写真館などで見合い写真をとらせる。上半身のと全身のと2枚とってもらう人もあるが，全身のだけの人もいる。きもの姿の場合が多い。見合い写真ができると母親は知り合いの人にその写真を配って，娘のよい結婚相手をさがしてくれるように頼む。そのときに娘の釣書と呼ばれる一種の身上書も渡しておく。釣書には娘の履歴，家族親族の仕事、学歴、趣味などを書く。

この仲介をする人を仲人と言うが，仲人役は社会的に信頼が高く，かつ結婚適齢期の男女についての情報を豊富に持っている人で，結婚を希望している本人あるいは両親から依頼されて引き受ける。最近では手数料をとって結婚相手を紹介する職業仲人，あるいは会社も増えている。

依頼された仲人は，双方の写真、学歴、職業、年収，趣味、家族構成などの資料をはじめ，相手方への希望条件を考慮したうえで，相応しいと思われ

るカップルを選出し，双方の意向を打診する。

そして，双方が互いに会うことを希望する場合，仲人は見合いの席を設定し，仲介役としてお互いを引き合わせる。見合いの場所は仲介した人のうちのこともあるし，レストランなどのこともある。見合いはレストランや料亭などで食事を交えながら、両親も同席して行い，一時，仲人、両親は座を外して，二人だけの会話の時間を作り，双方の理解を深める。最近，見合いもスタイルが変わりつつあり，このような固苦しい方法ではなく，仲人役から相手を紹介された後，自分たちだけでデートを繰り返し，結婚にいたることが多い。このような場合，見合いは恋愛のきっかけづくりとして考えられる。見合いの結果，双方のどちらかが相手を気に入らなければ，この縁談は成立しない。仲人は改めて新規の相手を選出して，改めて見合いを行い，双方が気に入れば，次は結婚を前提として二人の交際が始まることになる。

恋愛結婚の場合にも会社の上司などに結婚式のときの媒酌人をたのむが，この人を「たのまれ仲人」と言う。

しばらく交際してみて，双方が結婚に同意すれば，婚約することになる。最近は欧米風に婚約式をする人もいるが、日本の伝統的な婚約は「結納」をとりかわすことによって成立する。この風習は中国から始まって朝鮮や日本に伝えられたものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com